

紙版 ハコブネ×ブックス vol.60

<https://hakobune.wp-x.jp>

ハコブネ×ブックスは児童文学作品・YA作品を未来に語り継ぐ web サイトです。



雷のあとに

作者 中山聖子
出版社 文研出版
発行 2020年1月
ISBN 978-4580823907

review



小学五年生の女子、睦子は自信を持って堂々と自分の言いたいことを言えるような子ではありません。真面目でおとなしいだけで、きらめくようなところがない。そんな自分になってしまったのは、**母親に支配されて身動きがとれなくなっている**からではないかと、自分でも気づき始めています。保守的で独善的で**子どもを言いなりにしようとする母親の**颜色をずっとうかがっている睦子。学校での友だち関係もうまくいかなかったり、一人で内省に沈みながらも、それでも睦子は自分の心の世界を広げていきます。睦子とは対照的に、さらに**意固地になっていく**母親には、睦子の兄もついていけず反抗します。結局、偏狭な母親は、**話が通じない人として、子どもたちからもあきらめられます**。それでも、**理解を越えたところにも家族の情愛や繋がり**が残される救いもあります。



君だけのシネマ

作者 高田由紀子
出版社 PHP 研究所
発行 2018年7月
ISBN 978-4569787824

review



中学二年生の女子、史織は、父親の転勤で佐渡島に引越することになりました。母親は自分の両親の介護のために新潟に留まらざるをえず、同行できません。母親と離れて暮らすことを待ち望んでいた史織には、願ってもない好機でした。**母親から逃げださなければ自分が壊れてしまう**と史織は思っていました。母親の好きな服を着せられ、思い通りに中学受験もさせられ、しかも失敗したとなれば、気まずくて不登校にもなるうともいいます。佐渡島で一緒に住むことになった祖母が営むミニシアター「風のシネマ」で、映画に顔を輝かせる島の人たちと触れ合ったことで、史織は**自分の言葉を取り戻して**いきます。母親の**支配から卒業する**には、直接言わなければならぬことがある。母親が次のステップを迎えるために史織は痛みを孕んだ決断をします。

特集

わかりあえなくても大丈夫



まだ見ぬ君も、君のとなりで笑っていたい
汐見夏海
スタート出版 2021年

少女と毒

作者 佐藤まどか
出版社 講談社
発行年 2026年5月
ISBN 978-4065430194

review



中学二年生の女子、田中**桃色蒼玉**（ピンクサファイア）は、周囲の反対を押し切って母親が名付けたそのユニークな名前のためにからかわれ、学校生活もままならなくなっていました。父親は事業に失敗して、失意のまま事故死し、自分勝手な気ままな母親は**桃色蒼玉**を一人、残したまま減多に家に帰ってきません。親から放置され、十分な生活費も与えられない**桃色蒼玉**は困窮し、この惨めな生活から抜け出すために**家出を決行**します。目指したのは、新宿、**ト横広場**。全国から家出した子どもたちが集まるこの場所なら、**わかりあえる**友だちができるかと期待したのです。しかし、そこではさらに過酷な現実が**桃色蒼玉**を待っていました。苦難と曲折を経て、信頼できる大人たちと出会った**桃色蒼玉**は、彼女にあって**毒でしかない母親との訣別の時**を迎えます。

グレイッシュ

作者 大島恵真
出版社 文研出版
発行 2022年6月
ISBN 978-4580825239

review



中学二年生の女子、みゆるの家は経済的に困ったことになっています。カメランの父親は仕事が減って、**ほとんど働いておらず**、グラフィックデザイナーの母親がスーパリーのチラシ作りを請け負って家計を補っています。が充分ではありません。父親は機械が悪くなり、怒鳴ることもあって、家の中は次第に息が詰まるようになっていきます。それでも母親は、**そんな父親に同情的**です。共に美術大学出身の**アーティストタイプの**両親は、生活を支えるために働くことよりも、**自分らしく働くこと**に意義を感じているのです。みゆるは、家族のためであっても、**プライドを曲げて働く**ことができない両親の矜持に違和感を覚えています。誇り高く生きようとする両親と、**普通を求める**娘の考えは食い違っています。みゆるは迷走しながら、両親から受け継いだ自分自身の資質にも鑑み、進むべき道を見極めていきます。

特集

わかりあえなくても大丈夫



カーネーション
（いとうみく）
くもん出版 2017年

母親の自分への冷たい言葉や態度に、**嫌われて**いることを実感していた日和（ひより）は、中学生になって、母親との関係をはつきりさせようとしていました。愛しあえても、わかりあえなくとも、**家族にはそれぞれ**の**寄り添い方**があります。児童文学は美しいだけではない家族像を見せてくれます。

紙版「ハコブネ×ブックス」vol.60

2026年9月1日発行

事務系会社員。趣味で児童文学紹介サイト「ハコブネ×ブックス」（非営利）を運営しています。日本児童文学者協会第6回児童文学評論新人賞佳作他、諸々を受賞。



お問合せはこちらから。